



Title	古代日本語 ツ 又 の eba 条件形 : 『源氏物語』の語り文の条件づけ
Author(s)	大胡, 太郎
Citation	琉球アジア文化論集 : 琉球大学人文社会学部紀要 = Bulletin of the Humanities and Social Sciences University of the Ryukyus(6): 83-103
Issue Date	2020-03-14
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/45409">http://hdl.handle.net/20.500.12000/45409</a>
Rights	

古代日本語〈一ツ〉〈一ヌ〉の〈一eba 条件形〉

—『源氏物語』の語り文の条件づけ—

大 胡 太 郎

# 古代日本語〈-ツ〉〈-ヌ〉の〈-eba条件形〉

## －『源氏物語』の語り文の条件づけ－

大 胡 太 郎

はじめに

本稿は、昨年の拙稿「古代日本語〈-タリ〉の〈-eba条件形〉－『源氏物語』の語り文の条件づけ－」<sup>1</sup>に後続し、『源氏物語』の語り文における〈-eba条件形〉の古代日本語〈-ツ〉形〈-ヌ〉形を取り上げる。

前稿の冒頭に以下のように、拙論における前提と観点を記したので、ここに再掲しておく。

=====

物語文学作品の場面の中の時間は基本的に「非過去時制」によって描かれる。しかし、言うまでもなく物語全体が「過去」のことでありという前提が崩れることはなく、いちいちのセンテンスにおいては明示する必要がある時にのみ「過去時制」を伴ったセンテンスが現れる、という基本的な傾向が指摘できる。

この「過去時制」表現の排除傾向のため、いちいちの場面では、基本的にセンテンス相互のタクシス関係と、アスペクト、パーフェクト、インパーフェクトを表すサフィックスを伴った表現によって時間は進行する。このため、ひと続きの場面内でも「時間」は〈過去／現在／未来〉と言うより〈先行・後続〉と〈同時〉というアスペクトの原則に従っていることになる。

さらにひと場面の中では、複雑な出来事関係や人物関係を描くために、〈先行・後続／同時〉という原則的時間だけでなく、シンプルな「過去時制」表現を用いずに、時間を遡った「過去」が語られて、その場面の「現在」の出来事や人物に関係づけられることもしばしばあり、「エピソード」や「場面」はフラッシュバックする。あるいはフラッシュフォワードさえる。しかし、このこと

---

<sup>1</sup>『琉球アジア文化論集』第5号、2019.3。琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科紀要

は時間的秩序としての〈先行・後続／同時〉〈フラッシュバック〉などが「時間」表現のためだけにあることを意味しない。

本稿では、時間的に〈先行〉する出来事が、〈原因〉や〈理由〉、〈契機〉といった「意味」を付与された「条件づけ」へと移行してつきそい文となり、「条件づけられた」いいおわり文との関係を表現するつきそいあわせ文を、分析の対象とする。

つきそい文に、その場面の中にはない「過去」の出来事や人物や、その人物のエピソードが想起され、あるいは「未来」のある時点における出来事の成立が話し手によって想像され、その出来事成立時点以降に起こる、あるいはその出来事を〈原因〉や〈理由〉や〈契機〉として起きることを描きだすつきそい・あわせ文をいくつか取り上げ、つきそい文のアスペクト／パーフェクト・インパーフェクトのサフィックスをともなうつきそい文の条件形がどのようなテンポラリティーを構成し、かつそれがどのような条件づけへと移行しているかの分析を試みたい。また、それが、語り手によるナラティブディスコースやストーリー・テリングに関わる問題をいくつか析出し分析する。そしてさらに、今後は、発話する人物や場面、さらにはストーリーに対して持つ意味もさぐっていききたい。

なお、本稿をなすにあたっては、既に本学科卒業論文として、崎間祐賀子「古代日本語における条件づけを表現するつきそい・あわせ文 一つきそい文の述語が - eba の場合」、砂川すみれ「古代日本語における条件づけを表現するつきそい・あわせ文 一つきそい文の述語が - aba とする場合」（2017年度本学科卒業論文）という優れた成果があり、多くをこれに学んだ。そのさいに、物語文学の場面の中で語りの問題にクロスする多くの領域とヒントを得た。これを素描することを、本稿の目的とする。

=====

## 1. 終了限界達成=先行完成をあらわす〈-ツ〉の〈- eba 条件形〉

まず、想定される「典型」として、〈-ツ〉という終了限界達成をあらわす形を取り上げる。〈- eba 条件形〉のつきそいあわせ文のつきそい文において〈-ツ〉は〈-ツレバ〉のかたちをとる。

ひとえ文の動詞述語文において、〈ーツ〉形は終了限界達成、すなわち「語彙的意味の終了あるいは完成」をあらわす。このとき場面内の時間に対して、基本的には完成的であり、ひと続きの場面や時間におけるの終端をしめす場合がある。また完成的であるがゆえに交替的である場合もあり、最小限、後続する時間、すなわち「そして、それから」という継起的前進を生み出すというテキスト的機能がある。

〈ーツ〉形のこの機能が、つきそい・あわせ文のつきそい文におかれた時、どのような条件づけをいいおわり文との間におこなうのか、時間的な継起性や交替性にそれはとどまらず、何らかの〈原因〉〈理由〉〈契機〉などをしめすか、検討していく。

### 1-1, ひと続きの場面や時間の終端をしめす場合

まず、ひとえ文の動詞述語の〈ーツ〉形を見てみる。

- 1) ……(妹尼)「……しかあつかひきこえたまひけん人、世におはすらんや。……行く方知らで、思ひきこたまふ人々はべらむかし」とのたまへば、(浮舟)「見しほどまでは、一人はものしたまひき。この月ごろ亡<sup>う</sup>せやしたまひぬらん」とて、涙の落つるを紛らはして、(浮舟)「なかなか思ひ出づるにつけて、うたてはべればこそ、え聞こえ出でね。隔ては何ごとにか残しはべらむ」と、言少なにのたまひなしつ。

大将は、このはてのわざなどせさせたまひて、はかなくともやみぬるかな、とあはれに思す。……(手習⑥ 349 - 50)<sup>2</sup>

訳)「……こんなふうにあなたをお世話申し上げられた方が、この世にいらっしゃるのではありませんか。……あなたの行く方がわからないで心配申し上げていらっしゃる人々もございますでしょう」とおっしゃるので、「俗世におりましたころまでは一人はいらっしゃいました。ここ幾

<sup>2</sup>『源氏物語』本文と訳は、日本古典文学全集『源氏物語(一)～(六)』(小学館、1970～76年)により、本文後の( )内は巻名、巻数、ページを記し、訳には適宜( )内に主語など補った。以下同様。

月かの間に亡くなられたのかもしれませんが」と言って、涙の落ちるのを隠すようにして、「なまじ思い出すにつけてもかえっていやな気がいたしますので、とてもお話し申しあげることができませんのです。どうして隠しだてをいたしましょうか」と、言葉少なに言いはりなさった。

大将は、この人の一周忌の法要などをなさって、「はかない縁<sup>えにし</sup>で終わってしまったことよ」としみじみ悲しくお思いになる。……

入水自殺を試みた浮舟は、横川僧都らに助けられ、小野の山荘にて僧都の妹尼らに保護されている。都で、薫大将は浮舟の遺骸のないまま葬儀をおこない、既にこの場面では一周忌を終えている。その噂を聞きながら複雑な思いでいる浮舟に妹尼は話しかけ、しばらく会話が続く。その終端部において、妹尼の問いかけた内容に浮舟は答えようとせず「のたまひなす=言ひなす+〈つ〉」【(答えることはできないと)言いはる(全集の訳)+終了限界達成】。この「言いはる」はもちろん意識であるが、「答えられない」ということについてのレトリカルな表現(ものがたり疑問文=反語)をもって答えたということである。

念のため、その後の1文も引いたが、場面は都の薫大将の描写に移っており、妹尼と浮舟の対話場面との時間・空間的連続性はない。つまり、浮舟のこの「のたまひなしつ」とは「《ナシは意識的に技巧を用いてする意》①巧みに言う。つくろって言う<sup>3</sup>」ことにより、答えたくない内容で答えられない、ということ。「伝え終わる」と同時に、継続していた対話場面を終わらせたということであり、述語動詞の語彙的意味の終了限界達成であると同時に、場面内の時間的継続性を終了させる終端性をしめす。

〈ーつ〉形の動詞述語文は、同一場面の中で、ある動作などが終了限界達成したことをあらわすのであり、そのとき、別の動作などが継続していても、あるいはあらたに始まっても、基本的には、それを妨げ、場面の時間の継起性までも強制的、排他的に終端化するというわけではない。述語動詞の終了限界達成のみならず、場面の時間的継起性をも終端化する場合とは、場面内の他の動作、変化、状態と〈同時〉的でなく、〈先行-後続〉の〈後続〉に位置づけ

<sup>3</sup> 大野晋他編『岩波古語辞典』岩波書店、1974年、「いひな-し」の項。

られている以外に関連づけられていないことが条件となるだろう。

もう1例、終端化する〈-ツ〉形の例を挙げておく。

2) ……まことや、導師の盃のついでに、

(源氏) 春までのいのちも知らず雪のうちに色づく梅をけふかざしてん  
御返し

(導師) 千代の春見るべき花といのりおきてわが身ぞ雪とともにふりぬる  
人々多く詠みおきたれど漏らしつ。(幻④ 535)

訳) そういえば、導師にお酒を賜るときに、

春までの命もどうかわからない。だからこの雪の中でほころびはじ  
めた梅の花を今日かざしにすることにしよう

御返し、

千歳もわたって春を見られるはなでありますようにと、院の御長命  
をお祈りしておいて、私のほうは、雪が降るのといっしょに年ふり  
てしまいました

他の人々もたくさんお詠みおきになったが、記しおかずにすんでし  
まった。

紫の上の死去後、喪に籠もっていた光源氏が、年末の仏名会ぶつみょうえの日、訪れた人々の前に、久しぶりに姿を現し、その席での歌のやりとりの場面である。参会した多くの人々も歌を詠んだが、〈語り手〉によってそれらは「漏らす=記録ないし記憶から漏らす+〈ツ〉」、ゆえに語られないという体裁をとっている、いわゆる「省略の草子地」の例である。このように、実際は場面が続いているにもかかわらず、〈語り手〉が「省略」することを「宣言」し、場面を終端化することもある。

この場合、場面はまだ継続性を帯びているが、述語動詞「漏らす+つ」は語彙的意味の終了限界達成とともに、「ゆえに語ることができない」という〈語る〉行為の「終端化」が「宣言」される、行為遂行的なものである。

次に、つきそい・あわせ文のつきそい文の述語動詞の〈-ツ〉形の例を挙げる。

この場合、〈ーツ〉は〈ーツレバ〉の形をとり、〈原因〉〈理由〉〈契機〉などの条件づけを表現する。

- 3) 齋宮の御母御息所、もの思し乱るる慰めにもやと、忍びて出でたまへるなりけり。つれなしづくれど、おのづから見知りぬ。(葵の上方)「さばかりにては、さな言はせそ。大将殿をぞ豪家には思ひきこゆらむ」など言ふを、その御方の人もまじれば、いとほしと見ながら、用意せむもわづらはしければ、知らず顔をつくる。つひに御車ども立てつづければ、副車ひとだまひの奥に押しやられてものも見えず。……(葵② 16 - 17)

訳) 齋宮の母君の御息所が、もの思いに乱れていらっしやるお気持ちの慰めにもなろうかと、人目につかぬようにお出かけになった車だったのである。それとは気づかれぬようにしていたが、しぜんに御息所とわかってしまった。「それくらいの車には、そんな口をたたかせるな。大将殿を御大家と頼み申しているのだらう」などとどのしるのを、大将家の者もお供の中になるので、御息所にお気の毒なと思いながらも、引きとめようとするのも厄介と思うから、知らぬ顔をしている。とうとう車の列を乗り入れてしまったので、御息所は、お供の車の後に押しやられて何も見えない。

葵巻の有名な「車の所争い」の場面である。葵祭の新齋院の御禊の行列を見物に来た葵の上方と六条御息所方の牛車が、混雑した状況下で鉢合わせし、葵の上方の供の者たちが酔って荒々しく、光源氏の権勢をたのんで、御息所の車を無理矢理奥に押しやってしまった。引用の前の場面からひと続きで、葵の上方の供の者たちの無体ぶりが描かれ、その結果「つひに……立てつづく (牛車を並べて駐める) + 〈ツ〉」で述語動詞の終了限界達成であり、同時に一連の継続的な「争い」の終端をしめしてもいる。結果、御息所は「押しやられてものも見えず」という状況に立ち至る。

いいおわり文から見れば、つきそい文がしめす終端的状況が〈原因〉となり、御息所の「押し込められ何も見えない」という〈結果〉がさしだされるという、終端的先行 - 後続という時間的な関係が〈原因〉 - 〈結果〉の条件づけへと移



行しているととらえられる。

- 4) 今年をばかくて忍び過ぐしつれば、今はと世を去りたまふべきほど近く  
思しもうくるに、あはれなること尽きせず。……(幻④ 532)

訳) 今年一年をこうしてつらい思いをこらえて過ごしてしまったのだから、  
いよいよ俗世をお捨てになるべき時を近い時機にとお決めになら  
るにつけて、深いしみじみとした感慨が尽きないのである。……

この引用の直前の場面は11月の豊明とよのあかりの節会せちえの時期のことであるので、この「今年をば……」という年末場面の冒頭と直接に連続性・継続性はない。新しい場面の始まりにおいて、「今年一年をこうして……」「忍び過ぐす+〈ツ〉」として、述語動詞としての終了限界達成性をさしだすとともに、「こうして」という指示語によって、前段までの幻巻の一年という継続的な時間を終端化している。

そして、いいおわり文に語られる、光源氏が出家へと促される状況にとって、つきそい文の「つらい思いをこらえて過ごしてしまったのだから」(全集訳)は、〈原因〉-〈結果〉といった論理的、法則的なむすびつきではない。光源氏にとっての個人的な〈理由〉であり、全集が主観的な〈理由〉をしめす「-から」を用いて現代語訳していることは、その主観的むすびつきであるという理解を反映しているのであろう。語り文でありながら「忍び過ぐしつれ」とつきそい文の述語動詞は、光源氏の内面に即し敬語が省かれた自由直接言説<sup>4</sup>であり、主観的視点であり、いいおわり文とは主観的むすびつきであることをしめしている。

#### 1-2, 交替的に継起的前進性をしめず場合

次に、場面内の終端性をしめさず、終了限界達成をしめしつつ、次の展開へと交替的にはたらく〈-ツ〉形述語動詞をみてゆく。ここでもひとえ文の例、つきそい・あわせ文のつきそい文の述語動詞の例の順にしめす。

<sup>4</sup> 三谷邦明「言説分析の可能性」(『入門 源氏物語』ちくま学芸文庫、1997年、pp.233-34。

5) かしこよりまた御文あり。心知らぬ人しも取り入れて、「大将殿より、少将の君にとて御文あり」と言ふぞ、またわびしきや。少将御文はとりつ。御息所、「いかなる御文にか」と、さすがに問ひたまふ。……(夕霧④ 410 - 11)

訳) あちら(夕霧)からまたお手紙が寄せられる。事情を知らない女房が受け取って、「大将殿(夕霧)から少将の君へといってお手紙がございます」と言うのは、また困ったものである。お手紙は少将が受け取った。御息所は、「どういうお手紙なのですか」と、ご遠慮はなさりながらもやはりお尋ねになる。……

夕霧巻、夕霧大将が落葉の宮への文を送り、女房が受け取り、宛先とされた侍女の小少将の君が受け取った。それに対して落葉の宮の母、御息所がその内容について尋ねるという場面。全集には「夕霧から小少将に手紙があったということは、(母)御息所にとっては、(娘の落葉の)宮に内密の手紙が届いたものと了解される。男女交際の初めには、侍女などを介して文通するのが普通である<sup>5)</sup>」と説明されている。

この場面では、破線でしめした一連の動詞述語で交替的、継起・前進的に展開してゆく途中に「とる + 〈ツ〉」がさしはさまれている。動作主体、侍女が「手紙を受け取る」という述語動詞の終了限界達成がしめされ、と言うより、「受け取る」には内的な時間過程がないため「ひとまとまり的で完成的」であることがしめされ、次に別の動作主体、御息所の「手紙の内容を尋ねる」が後続する。この「受け取る」という動作の終了限界達成あるいは完成性は、ふくみに「小少将の君が手紙を受け取る - (小少将の君が内容を読む) - それを見た御息所が内容を尋ねる」という省略があろう。そして、この「受け取る + 〈ツ〉」には、場面全体の継起的前進性に対しての終端化は働いていない。

一連のはだかの形の動詞の連続の途中に〈-ツ〉形の動詞がはさみこまれているが、全体は交替的、継起的に前進するテキストを構成している。この語り

<sup>5)</sup> 日本古典文学全集『源氏物語(四)』小学館、1974年、p.410、頭注八。

文においては、はだかの形の動詞はタクシス関係におかれており、個々の動詞は内的なアスペクトを積極的にはしめしておらず、アスペクトよりもタクシス機能が前面化しているのだが、それゆえ結果的に、それぞれのはだかの形の動詞は完成的、交替的である有標形式と変わらないように見える。このテキスト機能のなかで、「とりつ」という〈-ツ〉形動詞は、「手紙を受け取り（+読み）終える」という動作の内的な時間過程をもうけて終了限界達成の時間局面をむかえることで、次の「(手紙の内容を) 尋ねる」ことへと交替可能になると考えられる。

- 6) ……今日は、<sup>かつらの</sup>桂殿にとて、そなたざまにおはしぬ。にはかなる御饗応<sup>あるじ</sup>と騒ぎて、……野にとまりぬる君達、小鳥しるしばかりひきつけさせたる荻の枝など苞<sup>つと</sup>にして参れり。<sup>おほみき</sup>大神酒あまたたび順流<sup>ずん</sup>れて、川のわたりあやふげなれば、酔ひに紛れておはしまし暮らしつ。おのおの絶句<sup>ぜく</sup>など作りわたし、月はなやかにさし出づるほどに、<sup>おほみあそ</sup>大御遊びはじまりて、いと今めかし。……（松風② 408）

訳) ……今日はやはり桂の院に、というわけで、（光源氏らは）そちらのほうにおいでになられた。にはかな御饗応をと騒ぎたてて、……野で旅寝に明かした若殿たちは、小鳥をほんのしるしばかりにひき結ばせた荻の枝などをおみやげにしてまいった。お盃が幾度も幾度も回<sup>まわ</sup>ってきて、川のほとりに出るのも危ない様子だから、酔いにとりまぎれて一日じゅうここにおいでになる。めいめい絶句などを次々と作<sup>つく</sup>って、月があざやかに顔を出<sup>で</sup>すころに、管弦の合奏が始<sup>はじ</sup>まって、じつにはなやかな感じである。……

光源氏が都の郊外の桂の院に赴き、そこに参集してきた若殿たちを饗応することになる場面である。あらかじめ予定されていたものではなく、成り行きでこのような宴「にはかなる御饗応」と管弦の遊びになったもののだが、それゆえ行われることは、ある程度の文化的パターンにのっとってはよいが、任意に展開してゆく面が大きいだろう。場面は朝、光源氏らが、そして若殿たちが移動動詞（おはす+〈ヌ〉、参る+〈リ〉）=来たこと、参集したこと、すなわち

到着・滞在をしめた後、日中から夜まで酒宴が続き、その後、漢詩を作り交わし、管弦の遊びに続いたことを語っている。

「おはしまし暮らしつ=ゐる+暮らす+〈ツ〉」は日中を酒宴で酔った皆が川辺に出て都に戻るのが危険なので桂の院で夜まで過ごしたこと、すなわち終了限界達成性をしめしているが、前例と同様、この場面を終端化するのではなく、日中そこで過ごしたことの終了であり、夜の時間帯の宴へと交替的である。

次につきそい文の述語動詞の〈ーツ〉形を見してみる。この場合、つきそい文の述語動詞は〈ーツレバ〉の形をとる。

7) ……この西面にしおもてににぞ、人のけはひする。衣きぬの音なひはらはらとして、若き声ども憎からず。さすがに忍びて笑ひなどするけはひ、ことさらびたり。格子かうしを上げたりけれど、守かみ、「心なし」とむつかりて、下ろしつれば、灯あかりともしたる透影すきかげ、障子さうじの上より漏りたるに、やをら寄りたまひて、見ゆやと思せど、隙ひもなければ、しばし聞きたまふに、この近き母屋もやに集ひゐたるなるべし、うちささめき言ふことどもを聞きたまへば、わが御上なるべし。……（帚木① 170）

訳）……御座所のすぐ西側に、人の気配がする。衣ずれの音がさらさらとして、若い女どもの声がするのも悪くはない。さすがにこちら（光源氏）を気にして、忍び笑ひなどする様子はわざとらしい感じである。格子は上げてあったが、紀伊守が、「不用意な」と小言を言って、下ろしてしまっただので、灯をともした向こうの部屋の透き影が、襖の上から漏れている所に、（光源氏は）そっと近寄って、見えるかしらとお思いになるが、隙間もないので、しばらく聞いていらっしやると、すぐ近くの母屋に集まっていたのであろう、ひそひそと話すのをお聞きになると、ご自分のことらしい。……

紀伊守邸に方違えに行った光源氏が、邸内の女性達の様子を伺っている場面である。順次進行してゆく場面において、場面内の「現在時（テンポラル・センター）」に「先行」してに上げてあった（上ぐ+〈タリ〉+〈ケリ〉）格子を、

邸あるじの主である紀伊守が「不用意だ」ととがめて「下ろす+〈ツ〉=終了限界達成」としてしめしている。この「障子の上より漏りたる」については諸説あり、全集頭注に「具体的情景は明らかでない。「障子の上より……」とは、襖の合せ目の隙間から向こうの透き影が見える、鴨居かもいの上の吹抜きの部分の天井に影法師が映ってちらちらする、上は北の意で、上手から灯の光が漏れてくる、などの諸説がある。<sup>6</sup>」とある。詳細はともかく、光や影の見え方が変化し、その「結果」このようになったということは言える。

場面内の継起的な出来事や動作の中で、終了限界性が、その次に起きることを生んでおり、それはまた終了限界達成したことが原因となった結果を生んだことをさしだしている。すなわち、「下ろしつれば」という条件形つきそい文「下ろす+〈ツ〉=終了限界達成+ば」は、〈結果〉を生み出す〈原因〉へとアスペクト的意味を移行させている。

- 8) 大殿油おほとなぶらまありて、絵どもなど御覽ずるに、「出でたまふべし」とありつれば、人々声づくりきこえて、「雨降りはべりぬべし」など言ふに、姫君、例の、心細くて屈くしたまへり。絵も見さして、うつぶしておはすれば、……（紅葉賀①404 - 5）

訳）大殿油を召し寄せて絵などをごらんになっているときに、かねて君（光源氏）からおでましになるつもりとの仰せがあったので、お供の人々が咳払いをして、「雨になってしましましょう」などと言うので、姫君（紫の上）は、いつものように心細くて、ふさぎこんでおしまいになる。絵も、見かけたまま、うつぶしておいでなので、……

光源氏が紫の上と絵を見ていたところ、光源氏は前もって「外出する」と言っていたので、お供の者が「出かける時間になったので」と、光源氏をせき立てるようになるので、紫の上はふさぎ込んでしまう、という場面である。

この例では「……とありつれば」は「(……との仰せが)あり+〈ツ〉」などと「あり」は解され、この「ありつ」の終了限界は場面の「現在」に継起的に起きた

<sup>6</sup> 日本古典文学全集『源氏物語（一）』小学館、1970年、pp.170 - 71、頭注一三。

出来事ではなく、場面の継起的前進する「現在」に対して「場面以前（であり事実上の）過去」として「先行」しており、「場面の現在」からフラッシュ・バックした光源氏の発話である。「先行完成した発話とその効力の残存」というようにとらえると、〈一タリ〉形同様にパーフェクト性をあらわすともみえるが、このような〈一ツ〉形動詞は、無条件にパーフェクト性の「効力」をあらわすというよりは、この場合のように「光源氏が供の者に伝達し命じた」というような身分関係や指示的あるいは命令的内容であることに拠っているのではないか。

ともあれ、この例は、場面の「現在」以前の、「先行（過去）」の出来事を〈原因〉や〈理由〉として、場面内に新しい次の展開が呼び込まれ継起的に前進してゆくためのフラッシュ・バックであり、次の新しい展開、時間的前進を生み出しつつ、それに対する「説明」としてもはたらいっており、7) の例の〈一ツ〉形の機能とは異なるものである。

## 2. 開始限界達成=インパーフェクトの意味をあらわす〈一ヌ〉の〈一 eba 条件形〉

〈一ヌ〉という開始限界達成をあらわす形では、〈一 eba 条件形〉のつきそいあわせ文のつきそい文において〈一ヌ〉は〈一ヌレバ〉のかたちをとる。

ひとえ文の動詞述語文において、〈一ヌ〉形は、動詞の語彙の意味カテゴリーによってかなりの異なりをしめすが、基本的に開始限界達成、すなわち「語彙的意味の開始あるいはインパーフェクト（不完成）」をあらわす。このとき場面内の時間に対して、基本的には不完成的であり、ひと続きの場面や時間においての始まりをしめす場合があるが、語彙カテゴリーによっては場面の終端をしめす。

また不完成的であるがゆえに同時的である場合、他の新しい出来事に対してバックグラウンドで、「継続」している場合もあり、最小限、後続する時間、すなわち「そして、それから」という継起的前進を生み出すというテキスト的機能がある。

〈一ヌ〉形のこの機能が、つきそい・あわせ文のつきそい文におかれた時、どのような条件づけをいいおわり文の間におこなうのか、時間的な継起性や交替性にそれはとどまらず、何らかの〈原因〉〈理由〉〈契機〉などをしめすか、検討していく。

## 2-1, ひと続きの場面や時間の終端をしめず場合

まず、ひとえ文の〈一ヌ〉形述語動詞の場合をみてゆく。

- 9) …… (浮舟)「尼になしたまひてよ。さてのみなん生くやうもあるべき」とのたまへば、(尼君)「いとほしげなる御さまを、いかでか、さはなしたてまつらむ」とて、ただ頂ばかりを削ぎ、五戒ばかりを受けさせたてまつる。心もとなけれど、もとよりおれおれしき心の人にて、えさかしく強いてもなたまはず。僧都は、「今は、かばかりにて、いたはりやめたてまつりたまへ」と言ひおきて、上りたまひぬ。(手習⑥ 286)

訳)「どうぞ私を尼にしてくださいまし。ただそうしていただければ生きていけそうに存ぜられます」とおっしゃるので、「いかにもおいたわしいご様子を、どうしてそんなことをしてさしあげられましょう」とおっしゃって、ただ頂の先ぐらいを削いで、五戒だけをお授け申しあげる。(浮舟は)それでは気がすまないけれども、もともとはきはきしない性分とて、気強く無理にとおっしゃることもできない。僧都は、「今は、もうこの程度にして、ご病気を癒しておあげなさい」と言い残して、山に登っていかれた。

入水自殺を図った浮舟が横川僧都らに救出され、妹尼に介抱されながら出家を望み、形式ばかりの出家作法をおこない、僧都は修行のため山へ去るという場面である。次場面は、あらためて妹尼が浮舟を介抱看病することの思いから語られ直し、直接の連続ではない。

破線部の一連の対話と受戒の後、僧都は言い残して去ることをしめす「上る + 〈ヌ〉」は、「上る」の開始限界達成をしめしており、このような「こちら側から去る」方向性をもった移動動詞の場合の開始限界達成は「出発」をあらわ

す。と同時に、この「出発」は、こちら側にとって、その直後のモメントとしての「結果としての不在」もふくみ的にあらわしている。僧都が「言い残す－出発する－（結果としての不在）」という一連の継起性がこの場面の終端化ももたらしている。

- 10) 中将、言ひわづらひて帰<sup>り</sup>ければ、(少将の君)「いと情なく、埋<sup>むも</sup>れてもおはしますかな。あたら御容貌を」など譏<sup>そし</sup>りて、みな一<sup>ひと</sup>所に寝<sup>む</sup>ぬ。  
夜<sup>よ</sup>半<sup>な</sup>ばかりにやなりぬらん、と思ふほどに、尼君<sup>しほぶき</sup>咳<sup>せき</sup>おほほれて起<sup>た</sup>きにたり。……(手習⑥ 318)

訳) 中将はかきくどいたかいもなく閉口して帰ってしまったので、「ほんとうに思いやりがなく、引込み思案でいらっしゃいますこと。これほどのご器量なのにもったいない」などと悪口を言って、みな同じ所で寝てしまった。

夜中ごろになっているだろうかと思う時分に、尼君が咳にむせんで起き出してきた。

手習巻、中将の君が浮舟に言い寄るが浮舟は全く応じず、あきらめて帰っていくので、侍女の少将の君が浮舟の悪口を言い、尼君や女房たちはみな寝たという場面。次の場面は時間的にある程度経過してから、新たに「夜半<sup>ぬ</sup>」まで飛んでおり、直接的連続性はない。その前の場面内は継起的であり、「寝＋〈ヌ〉」は開始限界達成をしめしている。「皆寝てしまう」ということは、その後は誰かが起きることや誰かが訪問して来るなど、何かが起きるまで、場面内には特に何も起こらないという意味で、9)の例と似て、出来事において「結果としての不在」である。そのため、この例の場合は終端化とも「中止、中断、停止状態の始まり」とも言えるだろう。

次につきそい文の述語動詞の〈－ヌ〉形を見してみる。この場合、つきそい文の述語動詞は〈－ヌレバ〉の形をとる。

- 11) 夜いたう更けてなむ、事<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>て<sup>て</sup>ける。上達部<sup>とうくう</sup>おのおのあかれ、后、春宮<sup>とうぐう</sup>か



へらせたまひぬれば、のどやかになりぬるに、月いと明かうさし出でてを  
かしきを、源氏の君酔ひ心地に、見すぐしがたくおほえたまひければ、上  
の人々もうち休みて、かやうに思ひかけぬほどに、もしさりぬべき隙もや  
あると、藤壺わたりを、わりなう忍びてうかがひありけど、語らふべき戸  
口も鎖してければ、うち嘆きて、なほあらじに、弘徽殿の細殿に立ち寄り  
たまへれば、三の口開きたり。(花宴① 425 - 6)

訳) 夜がすっかり更けてから、ようやく宴は終わったのであった。上達部  
がそれぞれ退散して、后や東宮もお帰りになってしまうだったので、閑散  
となつたところに、月がまことに明るくさし出てきて風情をそえるの  
で、源氏の君は、酔い心地で、見過ごしがたいお気持ちになられて、帝に  
お付きの女官たちもいまは休息していて、このような思いがけぬ機会  
に、ひょうっとしたら、具合のよい隙もあろうかと思って、藤壺の辺を  
どうにもおさえがたい思いでこっそりとうかがい歩くが、手引きを頼め  
そうな人のいる戸口もぴたりと閉ざしているので、ため息をついて、そ  
れでもこのままではあきらめられないという気がして、弘徽殿の細殿に  
お立ち寄りになると、三の口が開いている。

花宴巻、宴が終了し、上達部は散会し、后、東宮も帰ってしまったので、閑  
散とした内裏で、光源氏が藤壺の局に立ち寄ってみたが……という場面。宴の  
終了、人々の散会という一連の継起性の中で、「帰る + 〈ヌ〉」という移動動詞  
の場合は、開始限界達成化しており、9) の例と同様、「こちら側から去る」  
という「出発」をしめしつつ、同時に、こちら側にとって、その直後のモメン  
トとしての「閑散とした状態の成立」という「結果としての不在」もあらわし  
ている。

この例では、このことがつきそい文としてさしだされており、直後のモメン  
トとしての「結果としての不在」は一連の宴の出来事を終端化してもいるが、  
「のどやかになりぬる」とあらたな状態の成立へと交替的でもある。つきそい・  
あわせ文としてむすびつけられたこの例では、つきそい文の「帰らぬれば」は、  
アスペクト的意味から移行して、「直後のモメントとしての結果 = 不在」の〈原  
因〉として〈結果〉とむすびつけられている。

## 2-2、交替的に継起的前進性をしめす場合

次に、場面内の終端性をしめさず、開始限界達成をしめしつつ、次の展開へと交替的にはたらく〈ヌ〉形述語動詞をみてゆく。ここでもひとえ文の例、つきそい・あわせ文のつきそい文の述語動詞の例の順にしめす。

- 12) …… (光源氏)「よし、後にも人は参りなむ」とて、御車寄せさせたまへば、あさましういかさまに、と思ひあへり。若君も、あやしと思して泣いたまふ。少納言、とどめきこえむ方なければ、昨夜縫ひし御衣どもひきさげて、みづからもよろしき衣着かへて乗りぬ。

二条院は近ければ、まだ明うもならぬほどにおはして、西の対に御車寄せて下りたまふ。若君をば、いと軽らかにかき抱きて下ろしたまふ。……  
(若紫① 329 - 30)

訳) …… (光源氏は)「まあいい。後からでも誰か参るがよい」と言っ、て、お車をお召し寄せになるので、びっくりして、どうしたものかと、一回で心配し合っている。姫君(紫の上)もわけがわからぬとお思いで、お泣きになる。少納言(紫の上の侍女)は、もうお止め申すすべもないので、昨夜縫ったお召物を手にして時分でも見苦しくない着物に着替えて車に乗った。

二条院は近いので、まだ明るくならないうちにお着きになって、西の対にお車を寄せてお降りになる。(光源氏は)若君(紫の上)を、じつに軽々とお抱きになってお降ろしになる。……

若紫巻、光源氏が、紫の上の祖母尼君の邸から紫の上を突然連れ出し、彼の自邸の二条院に、いわば「略奪」する場面である。全集では連れ出すまでの場面が長く、連れ出して二条院に到着する場面を次の段階ととらえ段落を分かちているが、この「略奪」から二条院到着はひと続きであるので、ここでとりあげる。

事態の一連の唐突な展開の中で、少納言の君は観念して、光源氏が紫の上を乗せた牛車に同乗する。「乗る + 〈ヌ〉」がしめしているのは「乗る」という動

作の始まりではなく、「乗った状態」の始まり、開始限界達成であろう。そしてそれは「乗った」に次いで「+出発した」というふくみをもっている。さらに次いで「二条院は近いので……着いた」へと継起的に場面を前進させているという意味で交替的でもある。

- 13) ……いと忍びて通ひたまふ所の、道なりけるを思し出でて、門うち叩かせたまへど、聞きつくる人なし。かひなくて、御供に声ある人して、うたはせたまふ。……よしある下仕を出だして、

立ちとまり露のまがきの過ぎうくは草のとごしにさはりしもせじ  
と言ひかけて入りぬ。また人も出で来ねば、帰るも情なけれど、明けゆく  
空もはしたなくて、殿へおはしぬ。(若紫① 321)

訳) ……(光源氏は) ごくこっそりとお通いになる所が、この途中であったのをお思い起こしになって、門をお叩かせになるが、聞きつける人もない。しかたがなくて、お供のうちで声のよい者におうたわせになる。……(相手方は) 気のきいた下仕えの女を出して、

立ち止まって霧のたちこめたこの垣根が通り過ぎにくいとお思いなら。閉ざしてある草の戸などお邪魔にはなりますまい  
と言いかけて引っ込んでしまった。それきり誰も出てこないので、帰るのも風情のないことながら、空が明けてゆくのもみとなくてお邸にお帰りになった。

若紫巻、夜明けまでまだ間があるうちに、紫の上のもとから帰る途中の光源氏が、途次に忍びの通い所の女性宅に寄ったものの迎え入れてもらえず、仕方なく自邸に戻る場面である。邸内から出てきた下仕えの者の「入る+〈ヌ〉」は、前例 12) 同様に、「入り始めた」のではなく、「入ってしまった状態の始まり」である。このような位置変化、移動などによる出現あるいは消失をあらわす動詞では、〈-ヌ〉形はその語彙の意味(ここでは「入る」という消失)の実現した状態の始まりである。それゆえ「結果としての消失」について「直後のモメントからの継続する消失」をふくみにもつ。

この「直後のモメントからの継続する消失」は「それきり誰も出てこない」

状態として言い換えられ、この同値化された「出てこない」状態の継続を語るつきそい文を〈原因〉として「仕方なく帰る」という〈結果〉が語られる。「直後のモメントからの継続する消失」が直接つきそい文に置かれ〈原因〉という位置を与えられないのは、それがふくみ的な意味であり、もし「入りぬれば、……殿へおはしぬ。(入って行ってしまったので、仕方なく帰った)」ではいいおわり文の「帰った」の〈原因〉をつとめるのに〈説明〉性が足りておらず、時間的な〈契機〉にもとれてしまうだろう。「それきり誰も出てこない」という直接的に表現された状態を、この場合の〈原因〉としなければならない。

次につきそい文の述語動詞の〈-ヌ〉形を見してみる。この場合、つきそい文の述語動詞は〈-ヌレバ〉の形をとる。

- 14) ……今年はこの御賀にことつけて行幸<sup>みゆき</sup>などもあるべく思しおきてけれど、(光源氏)「世の中のわづらひならむこと、さらにせさせたまふまじくなん」と辞び申したまふことたびたびになりぬれば、口惜しく思しとまりぬ。(若菜上④ 89)

訳 ……(冷泉帝は)今年はこの(光源氏の四十歳の)御賀に事よせて行幸などもなさりたいとご計画になっていらっしやっただけども、院(光源氏)は「世間の迷惑になるようなことは、けっしてあそばされないように」と、ご辞退申しあげられることがたびたびになったので、(冷泉帝は)残念ながらお思いとどまりになられた。

若菜上巻、光源氏が四十歳を迎え、冷泉帝は、四十賀のため光源氏の自邸への行幸を計画していたが、光源氏がそれを何度も断ったので、断念したという場面である。

「(辞ぶことたびたびに)なる+〈ヌ〉」が何かしらの開始限界到達をあらわしているならそれは、「辞退することが何度も」という状態に「なる」という、「変化」というより「たびたびに」とあるように反復的な「辞退」によって「そのような状態への到達」した段階の始まりであろう。

そしてさらに言えば、そこには「何度も辞退されることを通しての、固辞す

る意志が強いということへの理解」というのに近い、前例 13) と同様、つきそい文ではふくみ的な「理解」を〈原因〉とする〈結果〉がさしだされており、アスペクト的意味からの移行がみられる。

- 15) 御四十九日までは、女御御息所たち、みな院に集ひたまへりつるを、過ぎぬれば、散り散りにまか<sup>な</sup>でたまふ。……（賢木② 91）

訳) 四十九日の御法事までは、女御や御息所たちがみな院に集ま<sup>な</sup>っていら<sup>な</sup>ったが、それが過ぎてしまうと、散り散りに退出<sup>な</sup>さる。……

賢木巻、桐壺院崩御後、四十九日の法要までは院御所に集まっていた女御や御息所たちが、それぞれ散り散りに退出する場面である。

この例では、「集う + 〈リ〉 + 〈ツ〉」によって 2 段階の時間局面をさしだしているのだろう。まず「集う + 〈リ〉」というパーフェクトが「先行完成 + 後続の段階」として「集まっている」という継続する状態をさしだし、その「状態」が「四十九日法要まで」と時期の期限をしめす時間副詞をともなった〈ツ〉形動詞で終了限界達成をしめす。そして「期限の終了限界達成」に対して、「過ぐ + 〈ヌ〉」は、「終了期限の達成」を「その後の段階の始まり」をしめす〈ヌ〉形でさしだしている。

この例においても、アスペクト的意味「開始限界達成」から〈原因〉へと、つきそい・あわせの条件づけへと意味が移行している。

## まとめ

前稿に引き続き同様なまとめとなるが、語り文において、物語が時間を進行させながら語り進める中で、複数の出来事の生起や認識、感情の生起が結びつけられ関係づけられるとき、その関係づけを、条件づけをあらわすつきそいあわせ文によって表現されることがある。そして〈-eba 条件形〉つきそい文に組み込まれる動詞述語文の〈-ツ〉形〈-ヌ〉形は、時間表現（終了限界達成性と開始限界達成性）であることを基盤としながら、〈原因〉〈理由〉〈契機〉という条件づけへも参与する。しかし、現代日本語のように「ので」「から」「す

ると」などに形態的に分化していないゆえに、これら、古代日本語ではこれらが複合的な状態であられることもしばしばある。

この条件づけは、語り文においては、登場人物にとって主観的な結びつきであっても、その登場人物の主観的な結びつきに語り手は関与していない以上、対象として客観的な条件づけとしてさしだされる。登場人物にとっての主観的な〈理由〉の条件づけが語り文として語られると、その現代語訳がしばしば〈原因〉の「-ので」と訳されているのは、このためだと考えられる。

さらに語りにおいて、自由間接言説あるいは自由直接言説となっている場合は、語り手と登場人物の二声的言説であるために、登場人物の主観的〈理由〉であり、同時に語り手によって客観化された〈原因〉でもあるという重層的なあり方も認められるべきと考える。

#### 《参考文献》

- 秋山虔他『日本古典文学全集 源氏物語』小学館  
奥田靖雄 1984 「おしはかり (一)」『日本語学』12月号、明治書院  
—— 1985 「おしはかり (二)」『日本語学』2月号、明治書院  
—— 1986 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文—その体系性をめぐって—」『教育国語』87号 むぎ書房  
—— 1993 「動詞の終止形 (その1)」『教育国語』第2期9号 むぎ書房  
—— 1993 「動詞の終止形 (その2)」『教育国語』第2期9号 むぎ書房  
—— 1993 「動詞の終止形 (その4) ——テンス——」教科研国語部会講義プリント  
—— 1994 「動詞の終止形 (その3)」『教育国語』第2期13号 むぎ書房  
工藤真由美 2014 『現代日本語ムード・テンス・アспект論』ひつじ書房  
言語学研究会・構文論グループ 1985a 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文 (1)」『教育国語』81号 むぎ書房  
—— 1985b 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文 (2)」『教育国語』82号 むぎ書房

- 1985c「条件づけを表現するつきそい・あわせ文 (3)」『教育国語』83号 むぎ書房
  - 1985d「条件づけを表現するつきそい・あわせ文 (4)」『教育国語』84号 むぎ書房
  - 1988「時間・状況をあらわすつきそい・あわせ文 (1)」『教育国語』92号 むぎ書房
  - 1988「時間・状況をあらわすつきそい・あわせ文 (2)」『教育国語』93号 むぎ書房
  - 1988「時間・状況をあらわすつきそい・あわせ文 (3)」『教育国語』94号 むぎ書房
  - 1988「時間・状況をあらわすつきそい・あわせ文 (4)」『教育国語』95号 むぎ書房
- 鈴木 泰 2012『古典日本語の時間表現』笠間書院

